

清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』

モニカ・エスポジト
(京都大學)

『金華宗旨』は著名な内丹書で、その存在は 1929 年にリチャード・ウィルヘルムの翻譯を通じて西洋に知られることとなった。この翻譯は、*Das Geheimnis der Goldenen Blüte: ein chinesisches Lebensbuch* というタイトルで出版され、カール・ユングの解説が寄せられている。ウィルヘルムが底本として使用したのは 1921 年から 1927 年にかけて出版された湛然慧眞子版で、これは、その序文に説明されているように、書店と古物商がひしめく北京の琉璃廠で発見されたのであった。実際、『金華宗旨』には数多くの版本が現存している。そして、それら全てが、神仙・呂洞賓に歸せられているのだ。こうした版本の成立は、總じて清代(1644-1912)にまで遡ることができ、道教の様々な支派や傳統に属している。

私の知る限り、『金華宗旨』には少なくとも七種の異本が存在し、その中でも稀覯なものが京都の大谷大学圖書館に所藏されている。扶乩によって啓示されたこのテキストは、多くの道教支派や傳統に用いられていた。『金華宗旨』には、原本の再構成に関わった道教の支派や傳統それぞれの特徴が残されている。(例えば『金華宗旨』には様々な乩壇の構成員の手による序がつけられており、彼らがどのようにしてこのテキストを授かり、どのように校正したかが語られている。) 様々な版本の序、注、そして十三章からなる内容を比較してみると、それぞれの異同や遺漏が明らかになる。清代に公開戒壇を擔っていた、道教の重要な一派である龍門派は、彼らの煉丹思想の基礎としてこのテキストを使用していたのみならず、その教徒たちに傳戒を行う靈的な根據ともしていた。なぜなら、このテキストは龍門派が護持する正純な教義を象徴するとともに、このテキストの所持のお陰で正統な傳戒を續けていくことができる、と考えられていたからである。彼ら自身が原本の所有者であると立證するために、また正當な流傳を受持した者であるという美德によって、金蓋山龍門派の師たちは独自の基準に則って『金華宗旨』を修正、校正した。

『金華宗旨』の版本を分析し、また正當性を主張する龍門派の原典上の異同を研究することで、清代道教と、こうした書物の正統な受持者であることを主張する様々な道教支派の奮闘に、光を當てることができるだろう。

Monica ESPOSITO モニカ・エスポジト
京都大學人文科學研究所助教授 Ph.D. (パリ第七大學)
主要著作 *L'alchimia del soffio*. “Longmen Taoism in Qing China: Doctrinal Ideal and Local Reality” “The Longmen School and its Controversial History during the Qing Dynasty” “Daoism of the Qing (1644-1911)” ほか多数